悪夢を憐れむ歌

真田一至

本書は二〇〇二年に「ＮＩＧＨＴ　ＭＡＲＥ４」に収録されたものに加筆修正した二〇一一年度版です。

■目次■

悪夢を憐れむ歌

序章　微睡みの街……11
一章　来訪者……19
二章　学校……41
三章　迷図……69
四章　怪談冷夜……97
五章　変調……133
六章　夢の墓……169
七章　魔の花……205
八章　憐れむ歌……233
九章　禊祓……273
終章　葬送……305

太陽
太陽……317
参考資料……328
あとがき……332

歌え歌えよ、哀し身を
泣いて泣ければ、歌いはせぬ

歌うは涙も粘れたから
歌うは狂いを誘うから

狂えば、自由になれるから

夜毎に起こる哀し事
歌う、歌うよ繰り返し

眠りを知らぬ我身とて
夢に狂いは求めはせぬ

狂いの夢に生きる身で
真の狂いを求めんと
狂いの自由を求めんと

繰り返しに歌、歌う。

それは我身を憐れむ歌
それは狂いを求める歌
終わらぬ夢を詩う歌

悪夢を憐れむ歌、と人は言う。

悪夢を憐れむ歌

初出「悪夢を憐れむ歌」一九九九年八月十四日

《序章　微睡みの街》

新宿新都心――――――――。

不夜城、とよく言われるこの街には文字通り、夜は存在しない。陽光があるうちには、陽の光が。闇に包まれる頃には、人工の原色の光がこの街を照らす。

この街には夜はない。
しかし絶対的な眠りは、確かにこの街にあった。

一般的に早朝と称される時間。
『店』は営業を終え、『店』で働く人々も家路につく。
始発電車は出ているが、通勤にも通学にもまだまだ早いそんな時間。
この街は束の間の眠りにつく。
夜というには明るいが、朝というには暗い。
曖昧な闇と光が街を包む。

それが、この街の眠り。その眠りは短いが故に、とてつもなく深く、静寂なものだ。
崇高さと同時に……どこか恐ろしさをも感じる『眠り』。
それは『死』に酷似している。
生きているのか、死んでいるのか。
それさえも分からぬ、眠り。

一見ゴーストタウンの、眠りに沈むこの街を、一人の青年が歩いていた。
漆黒の髪、闇色の瞳。……整いすぎた、その容貌。身に纏うのは、髪と瞳の色と揃いの、黒を基調としたスクウェアなものだ。この街で生きる男達とは、明らかに異質な雰囲気を持っている。青年の年の頃は、十八、九。まだ少年期の幼さが微かにだが残っていた。

――――――『眠り』と『死』は似ている。

『死』に沈む街を歩く青年の姿は、さながら死神のようにも見えていた。
この街で毎日の様に操り返される狂乱の宴。その宴の名残りが、ひっそりと存在していた。……例えば、匂い。
酒の甘い香り。嘔吐物の酸えた匂い。商売用の香水の残り香。

そうした匂い全てが『街』で生きる者達――――今は眠りについている者達の生きる臭いだという錯覚を覚えるのは何故だろう。

青年はふと、強い血の匂いに魅かれたかのように、道端に目をやった。
血に染まったタオルが投げ捨てられている。茶色への変色が始まっているから、昨夜の内に誰かが喧嘩なりした、その痕跡なのだろう。

（……暴力）

この街ではさして珍しいことではない。
この血の主は男だったのだろうか。
……女だったのだろうか。
青年はタオルに一瞥をくれただけで、さして表情を変えずに歩みを進める。

酒と暴力と濃密な性を匂わせる街。
その街で生きる人々がいる。
男がいる。

……女がいる。

今も昔も……。

どんな国にでも必ずある街。

それがこの街、だ。

青年は、ある雑居ビルの前で足を止めた。

古いそのビルは周囲のそれよりもわずかにだが、高い。それを眺め上げてから青年は、ビルのすぐ脇の錆びかけた非常階段を昇り始めた。

白いペンキが剥げかけた鉄柵の間からは、すぐ隣のビルの汚れた外壁が見えるだけだが、青年の目には入っていないようだった。

青年は何を見ているのか……。行く手を見ているのか、何も見ていないのか……。

何も目に入らぬ程に思考に沈んでいるかの様にも見える。

青年の秀麗な顔には、表情らしい表情は浮かんでいなかった。ただ足を動かし続け、階段を機械的に昇っていく。

カン、カン、カン……と革靴の底と鉄の階段が触れあい音を立てる。

淀んだ風に乗って、電車の走る音が伝わって来ているのが、次第に分かるようになる。

――――――微かに、歌声が聞こえた。

階段が途切れ、突然視界が開けた。
青紫色の空が目に飛び込んで来る。

屋上だ。

打ちっぱなしのコンクリートの地面。
大きなネオン看板の電気は落とされている。
張り巡らされたフェンス。

フェンスの上に小さな白い人影。
青年はその人影に目を止めると、目を細めた。

怒りとも哀しみともつかない、そんな表情。
初めて表情を形作った青年はゆっくりとその人影に近づいていった。
絶え間なく続く歌声は、今やはっきりと聞こえてきた。
微かに甘さを滲ませた高めの声で、囁くように歌う。
その歌は、子守歌だった。

「ねんねんころり　ねんころり
裏のお山の姫様が
ゆうるりおりて参ります
歌をうたってござります
お花をだいてござります
ねんねんころり　ねんころり……」

白い人影は、全身白い服を着ている少女だった。
日本人にしては珍しい天然の栗色の髪が、短い割に風に遊ばれている。猫毛のような柔らかい髪質なのかもしれない。
年の頃は……青年よりも一つ二つ下だろう。まだ女性と表現するよりも少女と表現した方がしっくりする年頃。
少女の着ているロングコートが、パタパタと音を立ててなびく様はまるで羽が生えているかのような錯覚に陥らせる。
少女は青年の気配に気がついたのか、ふと口を噤んだ。
青年は少女が座るフェンスから少し離れた場所で足を止めた。

「……やはり、ここにいたのか」

静寂の中、青年の低めだがよく通る声が響いた。

「やっぱり……分かっちゃったの……」

少女は微かに口元に笑みを刻むと、青年をゆっくりと振り返った。
少女の鳶色の双眸と青年の闇色の双眸の視線がぶつかる。

白と黒の対而。
青年と少女。
『男』と――――――『女』。
風に抱かれている『女』が呟く。
「歌っていたの。憐れむ歌を」
地に足をつけている『男』が応える。
「悪夢に……か」

『女』は笑う。

「此処は、終わらない『悪夢』の街だから」